

ある種の確率偏微分方程式の解の近似について

九大工. 国田 寛 (Hiroshi Kunita)

ランダムな係数をもつ偏微分方程式を確率偏微分方程式という。ランダムな媒質における熱方程式, ランダムなポテンシャルをもつ Schrodinger 方程式等はその例であり, 物理学の種々の問題と関係して研究されている。一方制御理論, フィルター理論等工学の問題においても確率偏微分方程式が研究されている。この報告では非線形フィルター理論で用いられる Zakai の確率偏微分方程式をとりあげ, その方程式の解の近似と確率力学系 (stochastic flow) の近似の問題と関連させて論じている。

I. Zakai の確率偏微分方程式

まず n 階及び $n-1$ 階の偏微分作用素を導入する。

$$L(t) = \frac{1}{2} \sum_{j=1}^r X_j(t)^2 + h_0(t),$$

$$M_k(t) = Y_k(t) + h_k(t), \quad k=1, \dots, m.$$

ただし $X_j(t)$, $j=1, \dots, r$ 及び $U_k(t)$, $k=1, \dots, m$ は一階偏微分作用素で

$$X_j(t) = \sum_{i=1}^d X_j^i(t, x) \frac{\partial}{\partial x_i}, \quad Y_k(t) = \sum_{i=1}^d Y_k^i(t, x) \frac{\partial}{\partial x_i}$$

と表わされ係数 $X_j^i(t, x)$, $Y_k^i(t, x)$ は (t, x) につき連続かつ x につき C^∞ -級関数とする. $f_k(t) = f_k(t, x)$, $k=0, \dots, m$ は (t, x) につき連続, x につき C^1 -関数とする.

$W_t = (W_t^1, \dots, W_t^m)$ は確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, P, \mathcal{F}_t)$ 上の standard Brownian 運動とする. Zakai の確率偏微分方程式は次のように表わされる.

$$(1) \quad dU_t(x, \omega) = L(t)U_t(x, \omega)dt + \sum_{k=1}^m M_k(t)U_t(x, \omega) \circ dW_t^k$$

定義 確率場 $U_t(x, \omega)$; $0 \leq t \leq T$, $x \in \mathcal{R}^d$ が次の性質をもつとき, $t=t_0$ で初期値 $f(x)$ をもつ方程式 (1) の解という.

(i) ほとんど全ての ω に対し, $U_t(x, \omega)$ は (t, x) につき連続かつ x につき C^∞ -級関数

(ii) x を固定すると $U_t(x)$ は \mathcal{F}_t に適合した semimartingale かつ, その martingale 部分は (t, x) につき連続かつ x につき C^∞ -級 (a.s.)

(iii) 各 x を固定すると次の確率積分方程式が成り立つ

$$(2) \quad U_t(x) = f(x) + \int_{t_0}^t L(\tau)U_\tau(x) d\tau + \sum_{k=1}^m \int_{t_0}^t M_k(\tau)U_\tau(x) \circ dW_\tau^k$$

上の確率偏微分方程式の解の存在,一意性については, Pardoux [1], Krylov-Rozovsky [2], Kunita [3] 等の研究がある。

二階の放物型線形方程式の解は確率微分方程式の解を用いて表現できることはよく知られている。上述の Zakai 方程式の解も確率微分方程式の解を用いて表現出来る。このことを示すために別の確率空間 $(W, \mathcal{B}, \tilde{P})$ 上に n -次元 Wiener 過程 $B_t = (B_t^1, \dots, B_t^n)$ を用意する。直積空間 $(\Omega \times W, \mathcal{F} \otimes \mathcal{B}, P \otimes \tilde{P})$ を考えると, W_t と B_t は独立な Wiener 過程である。

$$\tilde{Q}_{s,t} = \sigma(B_u - B_v, W_u - W_v; s \leq u, v \leq t)$$

とあし, $(\Omega \times W, \mathcal{F} \otimes \mathcal{B}, P \otimes \tilde{P})$ 上に n 次元の後向き確率微分方程式を考える。

$$(3) \quad d\hat{z}_s = - \sum_{j=1}^n X_j(s, \hat{z}_s) \circ dB_s^j - X_0(s, \hat{z}_s) - \sum_{k=1}^m Y_k(s, \hat{z}_s) \circ dW_s^k$$

定義. t を固定する。 $\tilde{Q}_{s,t}$ に適合した後向きの連続 semi-martingale $\hat{z}_s, s \in [0, T]$ を

$$(4) \quad \hat{z}_s = \alpha + \sum_{j=1}^n \int_s^{t^+} X_j(z, \hat{z}_z) \circ dB_z^j + \int_s^{t^+} X_0(z, \hat{z}_z) dz + \sum_{k=1}^m \int_s^{t^+} Y_k(z, \hat{z}_z) \circ dW_z^k$$

と与えるとき (3) の解という。ただし $X_j(z, \alpha), Y_k(z, \alpha)$ は一階偏微分作用素 $X_j(t), Y_k(t)$ の係数の作り手とする。

$\int_s^t f_t \circ dB_t$ は後向き Stratonovich 確率積分で、 $\hat{f}_{s,t}$ に
 適した後向き semimartingale $f_s, s \in [0, T]$ に対し次式で
 定義される。

$$\int_s^t f_t \circ dB_t = \lim_{|\Delta| \rightarrow 0} \sum_{e=0}^{n-1} \frac{1}{2} (f_{t_e} + f_{t_{e+1}}) (B_{t_{e+1}} - B_{t_e})$$

ただし $\Delta = \{s = t_0 < t_1 < \dots < t_n = t\}$.

以下では関数 $X_t(t, x), Y_t(t, x)$ は有界関数であるとある。
 このとき (4) は唯一つの解をもつ。これを $\hat{\Sigma}_{s,t}(x, \omega, W)$
 と書く。次の命題はよく知られている。

命題 1. $\hat{\Sigma}_{s,t}(x, \omega, W)$ の変形で、ほとんど全ての (ω, W) に
 対して次の性質をもつものが存在する。

- (i) $\hat{\Sigma}_{s,t}(x, \omega, W)$ は (s, t, x) について連続、 x について C^∞
- (ii) s, t を固定すると、写像 $\hat{\Sigma}_{s,t}(\cdot, \omega, W): \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^d$ は C^∞
 微分同型である。
- (iii) $\forall s < t$ に対し $\hat{\Sigma}_{s,u} = \hat{\Sigma}_{s,t} \circ \hat{\Sigma}_{t,u}$

証明は Kunita [4] を参照せよ。

今 t_0 を固定して $t \in [t_0, T]$ に対し

$$(5) \quad U_t(x, \omega) = \mathbb{E} \left[f(\hat{\Sigma}_{t_0, t}(x, \omega, \cdot)) \exp \left\{ \sum_{k=1}^m \int_{t_0}^t h_k(\tau, \hat{\Sigma}_{\tau, t}(x, \omega, \cdot)) \circ dW_\tau^k \right. \right. \\ \left. \left. + \int_{t_0}^t h_0(\tau, \hat{\Sigma}_{\tau, t}(x, \omega, \cdot)) d\tau \right\} \right]$$

とおく。

定理 2. 上の $u_{t, \alpha, w}$ は (2) の解である

証明の概略.

$$\Phi_{s,t}(\alpha) = \exp \left\{ \sum_{k=1}^m \int_s^t h_k(r, \hat{\Sigma}_{r,t}(\alpha)) \circ dW_r^k + \int_s^t h_0(r, \hat{\Sigma}_{r,t}(\alpha)) dr \right\}$$

とおく。後向き伊藤の公式 (Kunita (47)) を後向きの積分に適用すると、次の前向き伊藤型公式を得る。

$$\begin{aligned} (6) \quad & f(\hat{\Sigma}_{s,t}(\alpha)) \hat{\Phi}_{s,t}(\alpha) - f(\alpha) \\ &= \sum_{j=1}^r \int_s^t \lambda_j(z) (f \circ \hat{\Sigma}_{s,z} \hat{\Phi}_{s,z})(z) \circ dB_z^j \\ &+ \sum_{k=1}^m \int_s^t \gamma_k(z) (f \circ \hat{\Sigma}_{s,z} \hat{\Phi}_{s,z})(z) \circ dW_z^k \\ &+ \sum_{k=1}^n \int_s^t f \circ \hat{\Sigma}_{s,z}(z) h_k(z, \hat{\Sigma}_{s,z}(\alpha)) \hat{\Phi}_{s,z}(z) \circ dW_z^k \\ &+ \int_s^t f \circ \hat{\Sigma}_{s,z}(z) h_0(z, \hat{\Sigma}_{s,z}(\alpha)) \hat{\Phi}_{s,z}(z) dz \end{aligned}$$

ただし $B_t^0 = t$ とする。右辺の最后一項を伊藤積分で書き直すと

$$\begin{aligned} (7) \quad & \sum_{j=1}^r \int_s^t \lambda_j(z) (f \circ \hat{\Sigma}_{s,z} \hat{\Phi}_{s,z})(z) dB_z^j \\ &+ \int_s^t L(z) (f \circ \hat{\Sigma}_{s,z} \hat{\Phi}_{s,z})(z) dz \end{aligned}$$

(6) の各項を測度 \tilde{P} で積分する。左辺は $u_{t, \alpha, w} - f(\alpha)$ 。

右辺の最后一項の積分は (7) の最后一項の積分が 0 である

ことに注意し、微分と積分の順序交換を行えば

$$\tilde{E} \left[\int_s^{t+} L(z) \left(1 + \sum_{s_1 < z} \sum_{s_2 < z} \tilde{L}_{s_1, s_2}(z) \right) dz \right] = \int_s^{t+} L(z) u_z(z, \omega) dz$$

(6)の右辺の才2重の積分は、確率積分と順序交換を行
うことである)

$$\sum_{k=1}^m \int_s^{t+} Y_k(z) u_z(z, \omega) \circ dW_z^k$$

才3重及び才4重の積分についても類似の結果を得る
これらと合せれば(2)が成立することがわかる。

II. 解の近似

確率微分方程式の近似解を求める方法として、Wiener過
程を折線に近似したり、mollifierを用いて滑らかなものを
近似する方法が知られている。これらの方法は確率微分方
程式の解が stochastic flow を定義することと証明する
ために用いられた。Ikeda-Watanabe [5], Bismut [6],
Shu [7]. 確率偏微分方程式についてもこれらの近似が
有効であることを示そう。

Wiener 過程 $W_t = (W_t^1, \dots, W_t^m)$ の折線近似 $W_t^{(n)}$ は
次のように定義する。

$$W_t^{(n)} = W_{\frac{k}{n}T} + \frac{n}{T} \left(W_{\frac{k+1}{n}T} - W_{\frac{k}{n}T} \right) \left(t - \frac{k}{n}T \right),$$

$$\frac{k}{n}T \leq t < \frac{k+1}{n}T \text{ のとき}$$

また mollifier に δ を近似列 $W_t^{(n)}$ は \mathbb{R} で定義する.

$$W_t^{(n)} = \int_0^T W_s \varphi_n(t-s) ds$$

ただし $\varphi(t)$ は $[0,1]$ の δ を $\epsilon > 0$ 非負 C^∞ 関数で $\int_0^1 \varphi(s) ds = 1$. $\varphi_n(t) = n\varphi(nt)$. 11 節の場合でも $W_t^{(n)}$, $n=1,2,\dots$ は W_t に一様収束する.

Wiener 過程 W_t の区分的に近めらかな近似列 $W_t^{(n)}$, $n=1,2,\dots$ があるから \mathbb{R} とする. 各 n に対し \mathbb{R} の確率偏微分方程式を考へる.

$$(8) \quad \frac{\partial u_t^{(n)}}{\partial t} = L_H(u_t^{(n)}) + \sum_{k=1}^m M_k(t) u_t^{(n)} \cdot \dot{W}_t^{(n),k}$$

ただし $\dot{W}_t^{(n)}$ は $W_t^{(n)}$ の時間微分である. $t=t_0$ の初期値 $f(x)$ をとる解を $u_t^{(n)}(x, \omega)$ とする. 11 節と同様に確率微分方程式の解を用いて表わそう. 確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, P \times \hat{P})$ 上に次の後向き確率微分方程式を考へる.

$$d\hat{X}_s = \sum_j X_j(\hat{X}_s) \cdot d\hat{B}_s^j + \sum_{k=1}^m Y_k(\hat{X}_s) \dot{W}_s^{(n),k}$$

時刻 t で定まる通解を $\hat{X}_{s,t}^{(n)}(\omega)$ と書く. 即ち

$$(9) \quad \hat{X}_{s,t}^{(n)}(x) = x + \sum_{j=1}^r \int_s^t X_j(\hat{X}_{r,t}^{(n)}(x)) \circ d\hat{B}_r^j + \sum_{k=1}^m \int_s^t Y_k(\hat{X}_{r,t}^{(n)}(x)) \dot{W}_r^{(n),k} dr$$

$\hat{X}_{s,t}^{(n)}$ に関する命題 1 が成り立つ.

定理3. t_0 を固定する.

$$(10) \quad u_{t_0+t}^n(\alpha, \omega) = \mathbb{E} \left[f \left(\frac{\Delta^n}{S_{t_0+t}}(\alpha, \omega, \cdot) \right) \frac{\Delta^n}{S_{s,t}}(\alpha, \omega, \cdot) \right]$$

は (2.1) の解である. $t_2, t_2 \leq t$

$$(11) \quad \frac{\Delta^n}{S_{s,t}}(\alpha, \omega, \eta) = \exp \left\{ \sum_{j=1}^r \int_s^t h_{j2}(\tau, \frac{\Delta^n}{S_{\tau,t}}(\alpha)) W_2^{(m), h} d\tau \right. \\ \left. + \int_s^t h_0(\tau, \frac{\Delta^n}{S_{\tau,t}}(\alpha)) d\tau \right\}$$

証明は定理2 と同様に出来る.

定理4. $W_t^{(n)}, n=1, 2, \dots$ が Wiener 過程の折線近似または mollifier 近似とする. $u_t^n(\alpha, \omega)$ 及び $u_t^m(\alpha, \omega)$ と共にその初期値 $f(\alpha)$ とも \rightarrow 確率偏微分方程式 (2) 及び (8) の解とする. このとき任意の $D^\alpha = \left(\frac{\partial}{\partial \alpha_i} \right)^{\alpha_i}$. $\left(\frac{\partial}{\partial \alpha_i} \right)^{\alpha_i}$ に対し

$$D^\alpha u_t^n(\alpha) \Rightarrow D^\alpha u_t(\alpha, \omega) \quad (\text{広義-様}) \quad \text{in } L^2(P)$$

が成り立つ.

この定理の証明のためには次の stochastic flow の収束定理が基礎になる.

定理5 定理3 と同じ仮定の下で

$$D^\alpha \left(\frac{\Delta^n}{S_{s,t}} \right) (\alpha, \omega, \eta) \Rightarrow D^\alpha \left(\frac{\Delta^m}{S_{s,t}} \right) (\alpha, \omega, \eta) \quad (\text{広義-様}) \quad \text{in } L^2(P \otimes \tilde{P})$$

$$D^\alpha \left(\frac{\Delta^n}{S_{s,t}} \right)^{-1} (\alpha, \omega, \eta) \Rightarrow D^\alpha \left(\frac{\Delta^m}{S_{s,t}} \right)^{-1} (\alpha, \omega, \eta) \quad (\quad) \quad "$$

が成り立つ.

文 献

- [1] E. Pardoux, Stochastic partial differential equations and filtering of diffusion processes, *Stochastics*, 3 (1979), 127-167.
- [2] N. V. Krylov-B. L. Rozovskii, On the Cauchy problem for linear stochastic partial differential equations, *Math. USSR Izvestiya* 11(1977), 1267-1284.
- [3] H. Kunita, Cauchy problem for stochastic partial differential equations arising in nonlinear filtering theory, *Systems & Control letters*, 1(1981), 37-41.
- [4] H. Kunita, Stochastic differential equations and stochastic flows of diffeomorphisms, *Lecture Notes in Math.* 1097 (1984), 144-303.
- [5] N. Ikeda-S. Watanabe, *Stochastic differential equations and diffusion processes*, North Holland-Kodansha, 1981.
- [6] J. M. Bismut, *Mécanique aléatoire*, *Lecture Notes in Math.* 866 (1981).
- [7] J. G. Shu, On the mollifier approximation for solutions of stochastic differential equations, *J. Math. Kyoto Univ.* 22 (1982), 243-254.